

# 森林管理署長が語る

令和6年4月

群馬森林管理署長 のばたなおき 野畑直城

## 【つ】 つる舞う形の群馬県

じょうもろ  
**ともかるた**※のうち最も群馬県民に愛着があり知られた札でしょう。

群馬県の南東部がくちばしで、南北に翼を広げて羽ばたいている鶴のシルエットです。

群馬森林管理署は、この鶴のうち、左翼の付け根となる県中央部から東部(利根下流森林計画区)と、右翼に当たる南西部(西毛森林計画区)の国有林野(約4万ヘクタール)を管理しています。



管内には、あかぎやま はるなさん みょうぎさん 上毛三山(赤城山、榛名山、妙義山)を始め、さりがわ わたらせがわ 栃木県境、かぶらがわ うすいがわ 長野県境、からすがわ かなながわ 埼玉県境に偏する山々、からすがわ かなながわ 桐生川や渡良瀬川、利根川水系(鏑川、碓氷川、烏川、神流川)の源流部に位置する国有林野があります。

群馬森林管理署が管理する代表的な国有林野を「上毛かるた」と「ゆかりの文学作品」にのせてご紹介いたします。  
(※「上毛かるた」44枚の絵札で群馬県の風土等を読んだ郷土かるた)

## 【す】 裾野は長し赤城山



関東森林管理局庁舎屋上からの赤城山全景(前橋市)  
(裾野は富士山(35km)に次ぎ26kmにも及びます。)



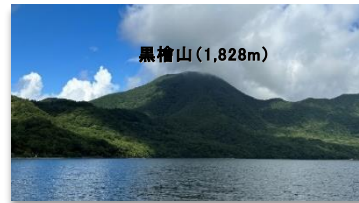
**赤城山**は日本百名山にも数えられている上州の名峰です。複式火山の赤城山は単体の山ではなく、主峰くろびさんの黒檜山を始めとする複数の外輪山の総称です。カルデラ中心部には

おの 大沼(カルデラ湖)やこの 小沼(火口湖)、こおせ 小尾瀬とも呼ばれるかくまんぶち 覚満淵(湿原)等があり、四季折々の景色が見られることで多くの方々が訪れられています。

すずがだけ  
鈴ヶ岳一帯の国有林野は、サントリーホールディングス株式会社様との協定締結により「サントリー天然水の森 赤城」(社会貢献の森)に指定して、生物多様性の保全に向けた活動に取り組んでいます。

「サントリー天然水の森 赤城」は、国有林野をフィールドとして、国とタイアップした生物多様性の保全活動が評価され、2030年までに陸と海の30%以上を保全する目標(30by30目標)の達成に向けた「自然共生サイト」の認定を受けています。

[「サントリー天然水の森 赤城」が国有林で初めて「自然共生サイト」に認定決定\(sunory.co.jp\)](https://www.sunory.co.jp/)



主峰黒檜山(前橋市)  
(黒檜山(国有林野)は赤城山の最高峰ですが、前橋市内からは手前の荒山(側火山)などに隠れて見ることはできません。)



鳥居峠からの覚満淵(前橋市)  
(後方は大沼と五輪尾根。かつては鳥居峠からの景観があまりにも絶景であることから極楽浄土に例えられたそうです。)

また、赤城山は、昭和22(1947)年のカスリーン台風で大きな山崩れ等の被害を受けた箇所です。現在でも東側斜面には崩壊地が多くみられ、土砂流出の発生源となっています。

近年の集中豪雨でも山崩れが発生しており、直下の県道や住宅などを山地災害から守る必要があります。

今後も崩壊地が拡大するおそれがある鍋割山や黒檜山東麓では、災害復旧のための山腹工などを実施しています。



復旧治山工事 鍋割山(前橋市)  
(ロープネット工で斜面の岩石を抑えて落石を防いでいます。)



田沢地区(黒檜山東麓)(桐生市)  
(山腹工で崩壊した山の斜面の侵食や拡大崩壊を防いでいます。)

## 【の】 登る榛名のキャンプ村



榛名湖畔からの榛名富士(右・高崎市)と烏帽子ヶ岳(左・東吾妻町)



**榛名山**は、中央の榛名山(カルデラ湖)を取り囲む山々をあわせた総称です。

榛名のダイダラボッチが、駿河のダイダラボッチと山づくり競争をし

て出来た山が榛名富士、土を掘った跡が榛名湖となり、榛名にあとひと山盛ろうとしたところで夜が明けたため、駿河の富士山が勝ったという民話があります。

榛名湖を中心に、榛名富士、烏帽子ヶ岳、鬘櫛山、掃部ヶ岳、天目山など、標高1千数百m級の山々があります。

榛名富士を中心とした榛名湖畔に位置する国有林野は、風光明媚な景観としてレクリエーションの森(風致探勝林)に指定しており、周辺のキャンプ場には隣接の伊香保温泉とともに、多くの皆様にお越しいただいています。

伊香保温泉と榛名山を結ぶ峠道(群馬県道33号渋川松井田線)は、車好きの世代には「走り屋の聖地」としても有名です。

(※詳しくは「聖地巡礼」をご覧ください。)



榛名高原駅から榛名山山頂駅(標高1,336m)にかかる榛名山ロープウェイ(高崎市)



榛名富士山頂からの風景(高崎市)  
(眼下に榛名湖、関東平野や上州の山々が一望できます。)

榛名山系の一角には、地元中学校のための「学校林」を設定しています。毎年1年生が必ず履修する屋外授業(森林体験活動)には、群馬森林管理署からも職員を派遣し、授業の手伝いなども行っています。



高崎市立倉淵中学校1年生の皆様(高崎市)



「森林体験活動」として間伐の作業体験



伐った間伐材から自分だけのコースターづくり

### 聖地巡礼

イニシャル

「頭文字D」(しげの秀一(講談社FNS系列アニメ))は、山道でいかに愛車を高速で走らせるかを求める走り屋の若者たちを描いた物語です。

主人公の走りの本拠地「秋名山」は榛名山をモデルとした架空の山ですが、秋名山のダウンヒルバトルで登場する「スタート地点」や「5連続ヘアピン」の峠道は、伊香保温泉街と榛名山を結ぶ「県道33号線」にあり実在します。



秋名のダウンヒルバトル「スタート地点」(作中では「秋名温泉」の看板)

作中に登場するコーナーを愛車で走り、シンクロ感を味わうために、数多くのドライバーたちが聖地巡礼として訪れています。地元渋川市では、「伝説の走り屋たちの聖地をめぐる!」のキャッチフレーズでコラボレーション企画を実施しています。



日光白根山(2,578m)

赤城山(1,828m)

県道33号線(別称「秋名のダウンヒル」)途中の高根展望台からの伊香保温泉街(渋川市)



「秋名山」以外で作中に登場する「赤城山」「妙義山」「碓氷峠」はいずれも実名で、群馬森林管理署が管理する山々が舞台となっています。

山々の特徴から峠道にもそれぞれの特徴があります。群馬森林管理署が行う地域に密着した森林の保全・管理は「走り屋の聖地」を守る役割も担っています。



### 【も】紅葉に映える妙義山



表妙義の最高峰・相馬岳などが連なる白雲山(富岡市)  
(妙義山は、大きく「表妙義」と「裏妙義」に分かれます。)



**妙義山**は、富岡市・安中市・下仁田町の境界に位置し、日本二百名山に数えられ、日本三大奇景の一つともされています。奇岩を巡る中・上級者向けの登山コースのほか、紅葉シーズンには、奇岩の岩肌との調和から紅葉スポットとしても有名で、多くの人々で賑わいます。

【み】 妙義から切り出す大杉 製糸場へ  
(富岡製糸場絵手紙かるた)

世界遺産登録の富岡製糸場(富岡市)の柱はスギ材で、建設当時、妙義山の樹齢数百年の国有林材を中心に近在村々の木材を使用したといわれています。

妙義山のご神木を切ると天狗のたたりがあると村人が反対したようですが、「国のお役に立つ柱となるので神も許してくれるだろう」と尾高惇忠(富岡製糸場初代場長)が説得したといわれています。



碓氷峠見晴台から見る妙義連峰(安中市)  
(見晴台から浅間山や裏妙義などの山々が見渡せます。)



**碓氷峠**は、群馬・長野県境にある中山道の難所として、日本の鉄道の難所としても知られた峠で、アプト式鉄道(急勾配を上る鉄道システム)が採用されていました。

アプト式鉄道は電気機関車の発達から昭和38(1963)年に廃止、また新幹線の開通から横川駅・軽井沢駅区間の鉄道が廃止(平成9(1997)年)され、その後は背後の国有林野の中に、めがね橋やトンネルを含めた「アプトの道」(遊歩道)が整備されています。歴史と自然を満喫しながらのハイキングが楽しめます。



碓氷第三橋梁(めがね橋)(安中市)  
(明治25(1892)年完成の煉瓦造りの橋梁(国重要文化財))

— 母さん、僕のあの帽子、どうしたでせうね?  
ええ、夏碓氷から霧積へ行くみちで、  
溪谷へ落としたあの麦稈帽子ですよー  
(ぼくの帽子(西条八十))  
キスミーと聞き取ったのは、アメリカ人である。  
キリツミと言ったのをそのように誤って聞いたのかも  
しれない。  
— 霧積温泉とは、どの辺にあるのか? 碓氷というか  
らには、群馬と長野の県境の近くかー  
「麦わら帽子と霧積」  
棟居の発見は、捜査本部を興奮させた。  
(人間の証明(森村誠一))

昭和のベストセラー「人間の証明(森村誠一)」の中で、東京で起きた殺人事件の被害者(アメリカ人)が、日本の「キスミー」へ行くと言って旅立った謎が解けた瞬間です。



**霧積温泉**は、群馬県安中市松井田町の霧積国有林の奥にある秘境の中のひなびた温泉です。

まわりの全域が豊かな広葉樹林(天然林)の国有林野であり、霧積川の水源に近いところに湧く源泉に恵まれた名湯として有名です。

勝海舟や伊藤博文、西郷従道などの政治家、与謝野鉄幹・晶子、幸田露伴、山口誓子、西条八十などの多数の文化人が訪れています。

群馬森林管理署では、霧積温泉の周囲全域に指定した国有保安林を対象に、治山事業やアクセス道路の災害応急工事などに力を入れています。



秘境に佇む霧積温泉(金湯館)(安中市)  
(「人間の証明」の舞台としても有名です。)



土砂から守る治山ダム



集中豪雨で発生した倒木の処理

## おすたか おね 御巢鷹の尾根

山の名前はほどなく判明した。御巢鷹山…。山も深く傷ついていた。引き受けたのだ。他のどの山でもなく、世界最大の事故を、あの御巢鷹山が引き受けたのだ。

(クライマーズ・ハイ(横山秀夫))



昭和60(1985)年8月12日の日航ジャンボ機墜落事故現場が群馬県上野村にあります。

事故現場全域が、国有林野内の無名尾根(本谷国有林76林班)でしたが、警察の公文書に名前が必要なたため、当時の黒澤丈夫村長が「御巢鷹の尾根」と名付けました。事故現場は、上野村が慰霊地として整備するため国が村に売却、公益財団法人「慰霊の園」(理事長は上野村長)が管理しています。

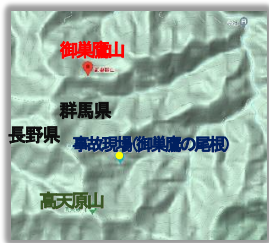
事故現場には慰霊碑(昇魂之碑)(写真右)が立てられています。毎年8月12日には麓にある「慰霊の園」(写真左)で追悼慰霊式が行われています。



慰霊の園(日航機墜落事故慰霊碑)(上野村)



昇魂之碑(上野村)



当時の報道の混乱などから「御巢鷹山」が誤って定着しましたが、「御巢鷹山」から南南東約2km地点の高天原山山系の無名尾根(本谷国有林76林班)が正解です。現在は、この区域を「御巢鷹の尾根」と呼んでいます。



高崎営林署(当時)が、現場への道案内・捜索、資機材の提供、歩道やヘリポート、避難小屋の作設などに大きく貢献したとして、中曽根総理大臣(当時)から贈られた感謝状(盾)が署長室で代々引き継がれています。

航空史上最大の事故の教訓を決して風化させることなく、有事の際に必要な異業種の枠を越えた防災協力体制を継続させていくのは、我々世代の役目です。

毎年、慰霊のために当地を訪れる方々が絶えませんが、現場周囲の国有林野にあっても、地域振興に資するきめ細かな管理経営の必要性を感じています。

## 群馬森林管理署

群馬森林管理署の沿革(高崎営林署からの変遷)	
明治24(1891)年	高崎小林区署が創設
大正13(1924)年	営林局署制で「高崎営林署」となる
昭和22(1947)年	林政統一で「高崎営林署」となる
平成7(1995)年	前橋営林署を廃止・高崎営林署に分割統合
平成11(1999)年	大間々営林署廃止・群馬森林管理署に再編
平成16(2004)年	高崎市の庁舎を関東森林管理局内に移転

群馬森林管理署は、高崎営林署を母体としており、明治24(1891年)高崎小林区署の発足から130有余年の歴史があります。



高崎営林署の旧庁舎(高崎市)

組織改革等により前橋営林署、大間々営林署を統合し、上州の象徴・上毛三山のほか、栃木県境、埼玉県境、長野県境や市町村界の近くに偏在する広範囲な国有林野を継承して管理しています。



関東森林管理局庁舎内(前橋市)



庁舎入口・左柱に関東局 右柱に群馬署の看板

どの地域でも、そこを拠点として暮らしを立てる住民の方々がいます。

地域経済への貢献はもちろん、安全・安心を守るとともに、地域の自然財産を預かる森林管理署の仕事は、現代社会ではどうしても優先しがちな短期的な経済や利便性の追求だけでは成しえないものがあります。

地域の声を丁寧に汲み取り、国有財産の価値を維持・向上し続け、後世に引き継いでいくべきところに、地元の国有林野を預かる森林管理署としての使命があるはずだと考えています。

高崎営林署と私

道なき道を、警察、自衛隊等救難者への道案内、その後、続々と到着する、救護、捜索隊のための歩道作設等、初動作業から地元営林署として、出来得る最大限の協力体制に入りました。特に一時期は、三日Aの現場に五人もの人達が入るといような状況でしたが、その人達が、入山するための、早急な歩道作設は、関係者から高く評価されました。

その後は、救援隊への食糧、飲料水等の空輸のためのヘリポート作設、それに伴う、チェーンソーなどの道具類の提供、墜落機残骸の運び出しのための架線張り、俗称「字溝」、一本松を含めた被害地の確認、被害調査、村営林道作設の諸手続、被害地の復旧作業、避難小屋の作設等々、あとから、あとから隙隙なく(?)出てくる事務処理等、まさに猫の手も借りたいような数ヶ月でありました。

この間の全作業は、検原担当区主任はもとより、全担当区主任、検原製品事業所主任以下全職員、そして署内の方々の率先する形で処理は、署長として本当にうれしく、心強く感じました。

これは、まさに、百年もの長き伝統が培われた力の賜物と感じている次第であります。犠牲者の哀容など一段落した十月下旬、藤岡市において、協力者に対する感謝状の贈呈式が挙行され、警察、自衛隊、消防団等と共に、営林局、署も当時の中曽根総理大臣より、直接贈呈の栄に浴しました。

それにも関わらず、事故直後、経営課長、検原担当区主任、係員の方達と、未だ残骸から灰のぼる現場に到着した時、その惨状に思わず背筋の寒くなる思いがしました。決して二度と起してはならない惨事だと思えます。被災者の御冥福をお祈りする次第であります。

(出典:高崎営林署在勤中の思い出(中澤 清\*) (高崎営林署101年史))  
(※ 第48代高崎営林署長(昭和60年4月~62年3月))